

●出題の意図

学校推薦型選抜（公募）Ⅰ期 1日目

【一】

本文は、音楽表現や演奏体験をめぐる記述を通して、作品理解や表現の受容がどのように形成されるかを考察する随筆的評論であった。

語り手の経験と一般化された議論とが行き来する中で、段落ごとの意味づけを追い、本文内の根拠に基づいて記述の意図を判断できるかを測ろうとしている。

【二】

本文は、「スキル」やコミュニケーション能力をめぐる現代的言説を批判的に検討する評論文であった。

「最善」といった価値語や、「一般論／個別的具體性」といった対比的概念を手がかりに、とりわけ、一般化された規範的言説を相対化し、文脈に即して再定位する論理の流れを、本文中の表現に即して精密に把握できるかを重視している。

いずれの大問においても、本文内の根拠から単なる情報の抽出ではなく妥当な理解を構成できるかを評価する。すなわち大学における学術的読解に接続する思考力を総合的に問うことを意図している。

学校推薦型選抜（公募）Ⅱ期

【一】

本文は、教育やコミュニケーションの在り方をめぐり、「しつけ」や規範の変容を手がかりとして現代社会の人間関係のあり方を考察する評論である。

日常的な語りや具体的事例において通念的に用いられる言葉を批判的に捉え直し、その再定義の過程を本文の根拠に即して読み取れるかを測ろうとしている。

【二】

本文は、睡眠や覚醒の質と、人間の生理的状态やパフォーマンスとの関係をめぐる科学的説明文であった。

科学的知見と、それに基づく応用的示唆を提示しながら複数の要因を交えた論が展開される過程を追い、情報を統合的に理解する力を測ることを意図している。

いずれの大問においても、単なる要素的読解にとどまらず、日常語と学術的概念との使い分け、具体と抽象の往復を通じて論旨を把握する力を総合的に問うことを意図している。

一般選抜（前期）1日目

【一】

本文は、数値・統計・エビデンスが重視される現代の傾向を手がかりに、人間を数量的指標によって把握することの意義と限界を論じる評論である。

統計的指標や客観的データの有効性を踏まえつつ、本文中の根拠に即して段落間の論理展開・対比構造・具体例と一般論の対応関係を把握できるかを測ろうとしている。

【二】

本文は、言葉やコミュニケーションのあり方をめぐって、現代の情報環境の変化が人間関係や集団形成、信頼の成立にどのような影響を与えているかを考察する評論である。

解答者は、インターネットや文字メディアの発達による利便性を認めつつも、そこからこぼれ落ちる身体性や相互信頼の契機に着目し、筆者の問題意識を本文に即して読み取れるかどうかを重視される。

いずれの大問においても、本文中の根拠によって妥当な理解を構成できるかを評価する。単なる情報の抽出ではなく、現代社会の通念を批判的に捉え直しつつ、抽象的な議論を構造的に把握する力を問うことを意図している。

本文は、近代科学が世界を数量化・分析可能な対象として把握してきた人間観・生命観の歩みをたどりながら、そこにどのような限界や盲点が生じたのかを考察する評論である。

また、ガリレイやデカルトをめぐる議論を追い、近代科学が人間を世界の中心から相対化してきた過程を踏まえながら、その科学的世界像が開いた認識の可能性と、そこからこぼれ落ちるものの双方を、本文中の根拠に即して理解できるかを測ろうとしている。

いずれの大問においても、読書や科学をめぐる通念を批判的に捉え直しつつ、しかし本文から逸脱した論旨を導くのではなく、妥当な理解を構成できるかどうかを評価する。